

特集



薬よりも強い? 「家族の力」

統合失調症などの治療には、「家族の力」が欠かせません。

その力を、どう活かしていけばよいのか?

病院で心理教育を行う「家族教室」には、

どのような意義があるのか?

宇治おうばく病院の大月祥宏医師と、

村井俊彦医師(副院長)にうかがいました。



大月祥宏 (おおつき よしひろ) / 精神科医 村井俊彦 (むらい としひこ) / 精神科医

家族の存在は、毒にも薬にもなる

Q ご家族が統合失調症になった場合、親御さんが「育て方が悪かったのではないかな」などと責任を感じてしまうケースも少なくないそうですね。

村井 そうなんです。でも、親の育て方や家族の接し方が原因で統合失調症になるということはありません。ですから、発症についてご家族が責任を感じる必要はまったくないのです。何よりその点を強調しておきたいですね。そのうえで、治療を進めるには家族の役割が重要になってきます。どれくらい重要かといえば、じつは「家族の対応が薬の効果に勝った」というデータがあるのです。

Q それはどういうことですか?

村井 順を追って話します。統合失調症治療の歴史の大きな節目となったのは、1950年代に「クロルプロマジン」という薬が開発されたことでした。この薬は非常に効果の高いもので、たつたので、「統合失調症(当時は精神分裂病)は薬さえ飲んでいればいい」という空気が、精神医学界全体に生まれました。

Q つまり、そのころは家族の役割が軽視されていたわけですね。

村井 ええ。ところが、1960年代のイギリスで、統合失調症の再発率を調べた大規模な調査が行われて驚くべき結果が出ました。薬をちゃんと飲んでいて家族の対応が悪いケースよりも、薬をちゃんと飲まずに家族の対応がよいケースのほうが、再発率が低かったのです。これは、世界中の精神科医にとって衝撃的な結果でした。

Q そこから、統合失調症治療における家族の対応が重視されるようになったわけですね。